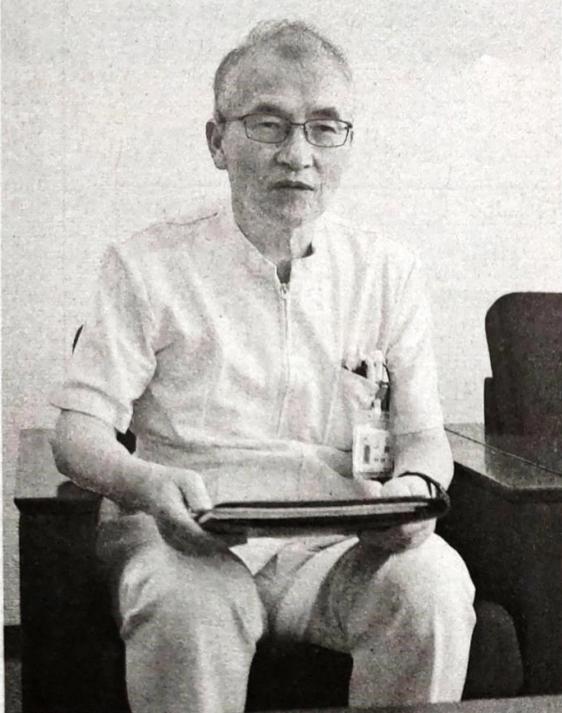


糖尿病治療切れ目なく

血糖値が高い状態が続き、放置すると脳梗塞や心臓病につながる糖尿病。県内の専門医らが勤務先の垣根を越えて集まり、切れ目のない医療を提供する試みが27年間続いている。かかりつけ医が普段の様子を診て、異常があれば大きな病院で検査や治療を行う「チーム医療」で病気の悪化防止に取り組んでいる。(長尾尚実)

松山市内で今月10日、「第

63回愛媛糖尿病チーム医療研修会」が開かれた。設立に携わった済生会松山病院の宮岡弘明院長(糖尿病内科)が「県内の医療関係者をレベルアップさせ、患者さんの幸せにつなげるために始まった」とこ



研修会の設立に携わった済生会松山病院の宮岡院長(松山市で)

病院の垣根越え研修会

を生かした医療を展開し、投薬治療とともに食事や生活習慣を見直してもらうことに取り入れた。

年に2、3回開く研修会では、症例や治療方針を報告して意見交換している。当初は松山市内だけだったが、98年からは県内に活動を拡大。糖尿病の治療は、飲み薬やインスリン注射で血糖値を一定に保つことが欠かせない。東日本大震災後の2012年には、災害時をテーマに求められる医療について話し合っ

糖尿病 血糖値を下げるインスリンが膵臓から十分に分泌されなかったり、効きが悪かったりして血糖値の高い状態が慢性的に続く。動脈硬化が進んで心臓病などのリスクが高まるほか、微小な血管が傷ついて症状の出ないまま網膜や腎臓、神経の機能が損なわれる合併症が起こる。インスリンを分泌する細胞が壊される「1型」と、遺伝や生活習慣が関係する「2型」がある。

患者の幸せつなげるため

厚生労働省の患者調査(2020年)によると、人口10万人あたりで糖尿病の治療を受けている患者数は、男性が全国の211人に対し、県内は271人。女性も全国で155人だが、県内は204人だった。

宮岡さんは「高齢の患者が多く、糖尿病になるとがんや認知症も発症しやすくなる。薬を飲み忘れてしまう認知症患者をどう治療するかなど、早急に取り組まなければならない課題が出てきた」と指摘する。

10日の研修会では、伊予市で「稲田内科医院」を営む稲田暢さんが認知症患者への治療例を報告した。薬を飲み忘れるなど様子がおかしく、別の病院へいったん入院して認知症と判明。訪問看護の活用で、血糖値の測定やインスリンの注射を確実に実施してもらおうように工夫したという。

稲田さんは「他職種との連携で、1人ではできない医療を提供できた。多くの事例を学べる研修会は大変貴重だ」と話した。